注文票

注文FAX 048-432-7335

氏名：	住所：	電話： fax：
	〒	

四六判並製 240頁　注文数　部

定価：本体2000円+税

2005年10月1日発行予定

日本僑報社刊行した主な書籍

中国人特派員が書いた日本
永遠の隣人―人民日報に見る日本人
日中相互理解とメディアの役割
あのころの日本と中国（王泰平元駐日特派員著）
従昭和到平成―駐日十五年報道文集
東瀛八年―中国科技記者日本見聞
大陸逍遙―俳句と随筆で綴る体験的中国
中国のインターネットにおける対日言論分析
日中「新思考」とは何か
中日関係に対する戦略的新思考
「対日新思考」論議の批判的検討
日中ホンネで大討論！
中国人の見た日本
中国人の日本奮闘記
中国の「対日新思考」は実現できるか
胡錦濤の対日政策

●日中記者交換４０周年記念出版

ジャパン スナップ

―元北京日報東京支局長　１０年間の特派員生活―

元北京日報東京支局長 駱為龍 ・ 陳耐軒共著　麗澤大学三潴正道教授監訳
【日中両国語版】 ISBN 4-86185-010-X

【内容紹介】

本書は、元北京日報東京支局長・駱為龍氏と陳耐軒夫人の共著である。二人は共に北京大学の卒業生で、閑静なキャンパスを離れ、賑やかな東京に足を踏み入れ、研究の傍ら仕事に励み、その中で様々な日本人と関わりを持つようになった。

二人の在日期間は異なり、経歴も若干異なるが、日本人に対して深い思いを抱き、共通する印象も少なくない。日本の大衆の中に入り、親密に交流し、日本を深く知り、理解し認識しようという姿勢は共に一貫している。特に駱為龍氏は、日本常駐記者として日本各地に足を運び、多くの友人を得、多くの特色溢れる記事を書いた。

中国の国家指導者の日本訪問に同行し、庶民生活では自ら壁板も薄い「下町」アパートに住む寒さとぬくもりを体験、文化面では千年の歴史を持つ清涼寺をめぐる文化交流からヒットソング『関白宣言』、日中の人気番組『おしん』に至るまで取り上げ、観光面では「下町情緒」探訪や富士山登頂を、また、花見から日本社会を考えた桜の木の下の思索もあれば中国人としてやるせない靖国神社参拝、池袋戦犯記念碑、殉国七士の墓の謎解明にも及び、人物では日本の写真家たちから四〇〇キロ長距離トラックの運転手まで、その取材対象は多彩を極めている。

この、日本に常駐した支局長は、中国社会科学院に入り、日本研究所長の重職を担った。まさにその座右の銘である「一生勉強、一生青春」そのままである。現在、二人は既に退職し、齢七十の老人であるが、なお精気に満ち溢れ、日本の発展と変化に注目しつづけ、隣国同士である日中両国に友好の時代が再び訪れることを願っている。

本書には、主として日本常駐記者時代の生活体験と思い出の一部を収めてあるが、きわめて特色豊かな読み物となっていて、両国の善意に溢れる人々の温かい交流がひしひしと伝わり、日中友好のあり方を考えさせる好著となっている。

目　次

第一章　切れない縁し

第二章　初めての日本特派員

第三章　庶民に溶け込む
- 我らが新居
- 一番寒い日
- 隣の一家
- 公害の挑戦
- スーパーマーケットのカタカナ語
- 「下町人情」を求めて
- ふるさとの祭り
- 旧友との再会
- 「五月病」
- 『関白宣言』
- 「新聞少年の日」
- 歌舞伎町の悲劇
- 『おしん』ブーム
- 東京人の生活リズム
- ふたつの撮影賞

第四章　忘れ得ぬドキュメント
- 「トラック野郎」と夜の400キロ
- 富士山登頂
- 花見に思う
- 靖国神社を検証する
- 「殉国七士の墓」の謎
- 「考古学士の新発見」

第五章　新たな始まり――中国社会科学院の殿堂に踏み入る

後記

著者略歴

■駱為龍　1933年生まれ。56年北京大学東方言語学部を卒業。74年1月から86年2月の期間、2度にわたり北京日報社の特派員として計10年間日本に駐在する。帰国後は北京市記者協会事務局次長、中国社会科学院日本研究所所長等を歴任、現在は中華日本学会及び北京中日報道事業促進会副会長等を務める。受賞歴、82年～84年に北京市優秀ジャーナリストに三回選出され、84年には全国優秀ジャーナリストに選ばれる。85年、日本短波放送主催の「アジア賞」受賞。　■陳耐軒　1932年生まれ。56年北京大学東方言語学部を卒業、同大学留学生事務室の通訳要員、日本語教育研究室講師及び副主任を歴任。87年、上海市科学協会の特別賞受賞。